2

テムズ河から漂う白い濃霧が、河沿いの倉庫を覆い尽くしていた。

すでに深夜だが人がいるのか、倉庫の窓からは明かりがもれている。ただ、霧に阻まれて中の様子までは窺えなかった。近くにある外灯の明かりも深い霧の中に沈み、まるで水底のランタンのようだ。

その淡い光に誘われる魚のように、揺蕩う霧の中を複数の人影が倉庫に近付いていた。

人影は素早く動いていたが、物音はまるで立てなかった。側を流れるテムズ河の水音だけが、ひたひたと聞こえてくる。静寂の中、遅滞のない動きで、人影は倉庫を包囲した。

人影は全部で七人。中には女もいるし、老人らしき者もいた。ただ、それぞれの顔は見えない。霧のせいではなく、全員が仮面を被っているからだ。

いや、一人だけ例外がいる。最後尾で跡を追う青年だ。仮面は極端に視界が狭く、慣れるのに時間がかかる。彼にはその時間がなかったため、直前まで仮面を付けないよう指示されているのだ。

やがて、先頭にいた仮面の男――夜会服（タキシード）を着た男が、軽く手を上げた。仮面の視界は悪く、また濃霧が漂う中だというのに、男が手を上げた瞬間、他の者たちはピタリと動きを止めた。

男は背後を振り返ると、最後尾の青年に仮面を被るよう無言で指示を出した。

青年が仮面を付ける。男は頷き、他の五人に合図を送った。次の瞬間、青年を除く人影たちは、倉庫の入り口と裏口に向かって殺到した。

慣れた手つきで鍵を破壊し、間を置かず倉庫内に侵入する。人影が吸い込まれた倉庫を、青年は仮面の奥から、緊張の眼差しで見つめ続けた。

やがて――

ガラスの割れる音と悲鳴が同時に上がり、窓からもれていた明かりが消えた。青年は息を呑んで、身体を強張らせる。霧の向こうの外灯の明かりだけが、仄かに倉庫を照らしている。

ふと、濃霧の中で影が動いた。倉庫の裏口からだ。思わず身構える青年の前に、濃霧の中から人影が飛び出してきた。

「ひっ！？」

その人影は、仮面を被っていなかった。

青年よりは年上だが、まだ若い。二十代後半に見える男だ。青年と鉢合わせたあと、ただでさえ青ざめていた顔から、さらに血の気が失せて蒼白になった。

「ま、待て！　降伏する。助けてくれ！」

男は青年を恐怖の表情で見ながら訴えた。いや、彼が見ているのは青年ではない。青年が被っている仮面の方だ。青年は、とっさに身構えたまま動けない。徒に動悸が速まっていく。

だが、

「ーーぶっ」

突然、男が硬直し、口から赤い泡を吹いた。

血だ。

青年が凍り付く前で、男は愕然と両目を見開き、のろのろと身体を捻る。背後を振り向こうとしたようだが、それが出来ないまま地面に崩れ落ちた。

倒れた男の背中からは、一本のナイフが生えていた。吐血したからには、切っ先は肺に達しているだろう。だが、まだ生きている。身体を捻った姿勢のまま、動けない青年を見上げて、訴えた。

「たす……たす、けて……」

青年が我に返った。

慌てて男の側にしゃがみ込んだがーー

「そこまでです」

霧の向こうから掛けられた声に、ビクリと動きを止めた。

やがて、霧の中から夜会服(タキシード)姿の男が現れる。彼は倒れる男の背後にかがみ込むと、するりと背中のナイフを抜き取り、そのまま、

サッ、

と一閃させた。

切断された頸動脈から、赤黒い血飛沫が飛んだ。その一滴が、青年の、差し伸べかけた手の甲に当たる。真冬の夜気の中、まるで焼けた火掻き棒を押し当てられたような、鋭い熱を感じた。

男の瞳から、たちまち生気が失せる。青年は絶句したのち、全身を震わせて立ち上がった。

「なぜ殺した！　この男はーー」

「ええ。この男は、《ギアス》を受けた《解放者》です」

夜会服(タキシード)の男は涼しい声音で答えると、おもむろに被っていた仮面を外し、死んだ男の脇に置いた。

「だ(ゝゝゝ)から、殺しました」

「……」

青年が全力でにらみつける前で、夜会服の男は慌てず優雅に立ち上がる。
「倉庫の物資を回収したのち撤収します。来て下さい、ミスター・ワトソン」

＊

夜会服（タキシード）姿の男ーージャックが最初に明かしたとおり、《ジャック・ザ・ナイトメア》の実体は、秘密部隊と呼ぶに相応しい集団のようだった。
特に「仮面」を被って「現場」に出る実行部隊の隊員たちは、下手な軍隊より兵士として鍛えられているように思われた。機械のように冷静で、常に命令に忠実。そして忍耐強く、タフである。視界を極端に制限された状態でも全く問題なく行動することができ、むしろ視覚に頼らないよう訓練されているため、夜の闇や濃い霧の中での作戦を得意としていた。《ジャック・ザ・ナイトメア》の犯行が夜間に集中しているもの納得が行くというものだろう。
まだその全容は把握できていないが、ジャックの話が本当なら、部隊を構成する人数は五十人近くにも上るらしい。ただ、その多くは情報の伝達や物資の補給、調査、工作活動に関わるサポート要員で、実行部隊の隊員は十数名程度のようだ。
また、サポート要員のみならず、実行部隊に所属する隊員たちも、日中は別の顔を持って生活している者が大半だった。そのため、彼らが常駐する「基地」のような施設も存在しない。代わりに、作戦毎に使用される拠点が、ロンドン各地に用意されていた。
いま居るのも、そうした拠点のひとつだ。誰の物とも知れぬ民家や、老舗酒場（パブ）の地下に、船着き場の小屋。ジャックの指示に従うようになって三日経つが、同じ場所で夜を過ごしたことは一度もない。彼は万事に付け用意周到だった。
いま潜伏しているの、ストランド街にある空き部屋だった。トラファルガー広場が目と鼻の先である。巷を騒がす「殺人鬼」がこんな場所に潜んでいようなどと、一体誰が想像するだろうか。
もっとも、一番意外なのは、いま自分がーーコナン・ワトソンがこの場にいることだろう。
しかも、同じ部屋には、殺人鬼たちを率いる男がいるのだ。
その男は、時刻を確認していた懐中時計の蓋を閉め、部屋の中を歩き回るコナンに声をかけた。
「少しは落ち着きましたか」
ジャックの声は平静そのもの。だが、コナンはまだ冷静とは言えない状態だ。反射的に険しい顔を向けた。
「前回の出動は空振りでしたからね。実戦（ゝゝ）は今回が初めてとなったわけですが……やはり動揺

しましたか？　もっとも、最初は誰でも、あんなものですよ？」
「……人が死ぬ場に立ち会ったのは、今夜が初めてってわけじゃない。貴方は忘れたようだが、ロジャー・ステイプルトンの首が斬られたときも、俺はその場にいた」
「ああ、そう言えばそうでしたね。彼のときも、それにジェームズ・ワトソンのときも」
兄の名前に、ぴくりとコナンが片方の眉を動かす。
ジャックは軽く肩を竦めた。
「とはいえ、見る立場と狩る立場では、まるで違って感じたでしょう？　たとえ直接手を下さなかったとしても」
「……その必要があったとは、いまもまだ、思えない」
作戦の意義はわかる。
モリアーティの一味は、裏社会に根付く犯罪集団だ。彼の《ギアス》を受けた《解放者》たちは、皆、精神の箍が外れている。放置すべきではない危険人物と言っても、過言ではないだろう。
ただ、《解放者》全員が法を犯しているとは限らないのだ。
「彼らを看過するのが危険だというのはわかる。だが、必ずしも殺害する必要はない。もちろん、向こうも反撃してくる以上、やむを得ない場合はあるだろう。しかし、少なくともさっきの男は、明確に降伏する意思を示していた。捕縛するだけで十分だったはずだ」
付着した血飛沫の熱は、いまなお手に残っている気がする。死に際の彼の瞳が、脳裏に焼き付いていた。
しかし、ジャックは涼しい顔だ。
「過去、片手の指では足りない数の《解放者》が、降伏すると宣言した直後に牙を剥きました。その結果、犠牲になった隊員が二人います。拘束したあとに不意を打たれた者を入れれば、さらに二人」
「……それは……」
「彼らに信義を期待するのは誤りですよ。そう判断するに足る犠牲を、我々は払ってきました。さらに言えば、一度《ギアス》を受けた者は、二度と元には戻らない。殺すしかないのです」
穏やかな口振りで、ただし一切の迷いを見せずに、ジャックは言い切った。その顔には普段と変わらぬ、薄い笑みが浮かんでいる。
「また、《教授（プロフェッサー）》の《ギアス》を受けた者は、彼の思想に染まり、支配される。貴方はここに来る決断を下す前に、ヘレン・ロイロットと会って、言葉を交わしたのでしょう？」
ジャックの言う通り、ヘレンはか弱く大人しい表向きの顔の裏に、別人の如く激しい狂気を秘めていた。あの狂気に触れたからこそ、コナンはアーサーになんの相談もなく、自分だけで

決着を付けようと決意したのだ。
しかし、それでも……。
「……危険がないと判断できる状況なら、命を奪うのは最後の手段に留めるべきだ」
コナンは自らの意見を曲げなかった。
ジャックは薄い笑みを貼り付けたまま、仕方なさそうにため息を吐いた。
「だとすれば、『危険がないと判断できる』必要最低限の条件は、《教授（プロフェッサー）》の排除です。彼を取り除かない限り、《解放者》の危険性は一オンスたりとも減じませんからね」
そう言って、ジャックはようやく笑みを消し、真剣な表情で言葉を続ける。
「忘れないで下さい。彼らを生かすということは、それだけ、次の犠牲者を生む確率を増やしているということなのです。ジェームズ・ワトソンが危惧したように」
そのジャックの台詞は、コナンに重たくのしかかった。彼の言う通り、犯罪者たちを重視した結果、罪のない犠牲者を出しては意味がない。
だが……自信はなかった。
コナンが知る《解放者》の中で、はっきりと「殺人」の罪を犯していたのは、ロジャー・ステイプルトンとヘレン・ロイロットの二人だ。
しかし、仮にあの二人が武器を捨てて命乞いをしたなら……コナンは彼らを殺傷することはできないだろう。たとえ、自分や自分の周りの人間が害される危険があったとしても。
「……ジャック。貴方はどうして俺をスカウトしたんだ？」
「言ったはずです。感傷だと。ジェームズ・ワトソンの仇を討つのは、貴方であるべきでしょう」
「……いまも、そう思っているのか？」
「ええ。もっとも、貴方が私と同じ判断を下すかどうかは、わからなくなりましたが」
とジャックは珍しく揶揄するように言った。
「それに、貴方だけが特別なわけではありません。《ジャック・ザ・ナイトメア》の構成員の多くは、《教授（プロフェッサー）》の犠牲者、もしくはその関係者なのです」
「そうなのか？」
鍛えられた実行部隊たちを見ているだけに、その事実は意外に思えた。しかし、思い返せば確かに、隊員には屈強な男だけでなく、若い女性や老人も含まれている。
暗殺に近い作戦が多いため、目立たず周囲に溶け込める人材を揃えているのかと思っていたし、そういう側面がないわけではないのだろう。だが、彼ら彼女らもまた、戦う「理由」があったのだ。コナンと同じように。
「踏ん切りが付かないのであれば、無理に我々の方針に従えとは言いません。ですが、作戦の

妨げになるような真似は謹んで下さい。訓練はしていますが、隊員たちも時には感情的になります」
コナンの胸中で渦巻く思いを正確に見抜いているかのように、ジャックは静かに話しかける。
コナンは無言で拳を握り締めた。その視線が、部屋にある一脚の椅子に吸い寄せられる。
椅子の座面には、一枚の仮面が置かれていた。さっき付けていた「コナンの仮面」だ。仮面の虚ろな眼差しは、コナンに決断を迫るかのように思えた。
そのとき、部屋のドアが小さくノックされた。
特徴的なリズムで、三度。コナンはとっさに身構えたが、それはあらかじめ通達されていた、部隊内でのノックだった。
「入りなさい」
と、いつもの様子に戻ったジャックがドア越しに命令する。
部屋に現れたのは、女性だった。さっき倉庫を襲撃したときのメンバーの一人だ。
「ジャック。ピーターから連絡です。問題が生じました」
「あちらの部隊がやられたのでしょう？」
ジャックが返すと、女性はわずかだけ驚きつつ「はい」と固い声で肯定した。
「定期連絡がないので、そんなことだと思いましたよ。状況は？」
「待ち伏せに遭ったとのことです。ピーター以外は全滅しました」
「そうですか。とりあえず、彼は無事なんですね？　このあとは」
「はい。追跡の危険を考慮して、最低三日、市外に潜伏することになるかと思います」
「非常時対応の指示通りですが、今回は例外です。少しでも戦力を確保したい局面に、戦線離脱は認められません。明晩には合流するよう指令を」
「畏まりました」
淡々としたジャックの指示に、女性は一礼して部屋をあとにした。
どちらもほとんど感情の動きを見せなかったが、報告を耳にしたコナンは、そうはいかない。
「お、おい？　いまのは、どういうことなんだ？」
「……今夜動いていた別の部隊が、《教授（プロフェッサー）》の罠にかかったようです。どうやら、こちらが本腰を入れて潰しにかかったことは、向こうも察知していたようですね」
「全滅と言っていたが――殺されたのか？　《ジャック・ザ・ナイトメア》の隊員たちが？」
「そのようですね。それなりの実力者を揃えていたつもりでしたが……」
コナンに説明しているときも、ジャックは平静なままだった。部隊を率いる立場故に、動揺を見せることを良しとしないのかもしれないが……容易く狼狽える自分との「差」を感じずにいられない。

「おそらく大佐が出て来ましたね。やはり彼直属の手下どもは面倒です……いえ、いずれ本格的な反撃が来ることは予想していたこと。想定より早いが、ここからが本番というところですか」

ジャックは腕を組み、部屋の中を行き来した。恐ろしいのは、思考に集中して見えるいまですら、彼の革靴が一切足音を立てていないことだ。

「しかし、いざこれだけの損害が出ると、ロンドンという地の利は、いまだ向こうにあると言わざるを得ません。そして本来守勢のはずの奴に、イニシアチブを奪われている。良くない傾向です。このまま消耗戦になるのは本意ではありませんし、《クラブ》の不審を買うのも癪に障る。ここはやはり、奴一人に狙いを絞るべきでしょう……」

「……奴というのは、モリアーティのことか？　狙いを絞るって……彼を直接叩く方法があるのか？」

モリアーティたちの最大の強みは、実体が見えず、全容が把握できないことだ。ロンドンという大都市そのものが、彼らの城塞なのである。当然、モリアーティ本人の居場所となれば、その中でもトップ・シークレットのはずだった。

コナンの問いに、ジャックは足を止める。

「ええ。可能ですよ。そのために骨を折りましたからね」

ほくそ笑むジャックの視線は、真っ直ぐコナンに向けられていた。

ゾクッと鳥肌が立つ。

「何度も使える手ではありませんし、本当に効果が見込めるという保証もありませんが……試して見る価値はある。そして試すからには、万全の態勢で臨まねばなりません。ミスター・ワトソン。貴方にも協力をお願いしますよ？」

＊